

平成27年8月7日（金）

ナイロビだより

ナイロビ日本人学校 玉井博史



カイロ日本人学校の小澤先生より、前任校へ定期的に便りを発行されていることを伺いました。前任校に籍がない立場としては、これまでそのような発想もなく、帰国後に機会があれば発表しようというくらいの考えでしかありませんでした。

しかしながら、今年度から高口先生のご高配により、さまざまな新潟県の先生と交流する機会ができ、活動の輪を広げることができました。感謝の意を込めまして、現状報告をさせていただきたく、まとめてみた次第であります。

I 26年度の主な取組

1 ケニアの学校へ本の寄贈（5月から）

報道関係の仕事进行なされていた方が退職されてから、子ども向けの本の執筆をされ、現地の学校に本を寄贈したいというメールが日本人学校に届きました。図書館担当でしたので、この件はわたしの担当ということになり、配布先を検討しました。

まず初めに、日本人学校の近くにある教育学部系の大学に50冊ほど寄贈し、どの年齢がふさわしいか分析してもらいました。残念ながら、その後の返答はありません。

その後、近くの小学校や知り合いの通う私立学校、またスラムにある学校などに寄贈することにしました。全部合わせると、150冊ほどです。とくにスラムの学校は教科書をそろえるだけでも大変なので、1人一冊手にとって授業ができるということで大変な盛り

上がりでした。



ナイロビの中心地は意外と都会？



少し道を外れると，そこは土の道路。雨が降ると悲惨です。下水路もないので，洪水になるとコレラが流行ることも。



もう，道と呼ぶには…。



校長室は，貨物列車のコンテナを利用しています。



校舎の向こうは，ケニア最大のスラム街，キベラスラム。

犯罪の巣窟と言われますが，地方からナイロビに来た人たちにとって，家賃も安く，ここからスタートする人も多いのです。



ちょうど、保護者会を開催している時間でしたので、保護者の方もいっしょに記念撮影。新しい本に、子どもも大人も大興奮でした。

2 一時帰国に伴う企業向け説明会（8月）

ナイロビは2013年9月にテロがあってから，もちろんなのですが，どの企業もナイロビの生活に不安を抱えているだろうと考えました。その当時は，40人ほどの児童が在籍していましたが，本校では経営の面から，50人を目標に掲げていました。また，ど

の子も生き生きと活動しており、風評で日本人学校を敬遠してもらいたくないという気持ちでいました。

そこで目を付けたのが、一時帰国で時間がある期間をねらって、希望がある企業に直接出向き、子ども達の様子を説明してくるというものでした。校長からはすぐに行動に移そうという言葉もらい、早速日本人会に案内メールを出しました。その結果、2社から申し出がありました。校長も一時帰国でしたので、2人で訪問することにしました。

残念ながら、訪問先からの入学生はありませんでしたが、日本人会からは、学校の職員ががんばっているという声をいただき、日本人会幹事からも日本人総会で「ぜひ日本人学校へ」という呼びかけをしていただきました。

3 幼児日本語教育講座の受講（8月）

日ごろから日本人会にお世話になっていることを国語科として、何らかの形でお返ししたいという思いから、一時帰国の際、幼児日本語教育講座を受講してきました。前年度に日本語教育学会がナイロビで開催され、大人に対する日本語教育については、いつでもアドバイスいただける環境だったので、幼児教育に焦点を当てました。

文字を書く前の「運筆」の重要さや、言語の背景の文化を大切にすること、保護者とともにねらいを定めていくことなど、幼児教育ならではの知識を得ることができました。

早速、ケニア在住で未就学児を育てているお母さん方に月1回のペースで会を開き、読み聞かせの工夫点や運筆の重要性、この先のビジョンをもつことの大切さなど、お話しをしました。「初めて聞きました。」「元気が出ました。」などの声を聞くことができました。

4 カウンセラーの招聘（9月）

雑誌『海外子女教育』に日本人学校における個別支援の体制は本国の学校に比べ、30年近く遅れているという記事を目にしました。それならば、独自に進めていかなければならないと考えました。特に注目したのは、「心のケア」の問題です。

ケニア独特のストレスなどを調査し、どのような援助が可能かなど、目白大学の高橋稔准教授・諏訪絵里子助教とともに共同研究を進めることにしました。高橋准教授とは、大学時代の友人で、メールでお互いの近況を交流する中で、課題が見えてきたことを受け、現在まで活動を続けています。

当初は、インターネットによるテレビ電話で、心の相談を進めていくことを目指していましたが、しかしながら、実際に来てみないと判断が付かない要素が多すぎるのが分かり、拙宅に滞在してもらいながら、本校の実態を実際に見てもらおうことにしました。

1週間の間に、学校の授業参観・現地でのサポーターの発掘・保護者への啓蒙活動・ストレスに関するアンケート調査・個別の相談など、ハードスケジュールをこなしてもらいました。

ストレスチェックには、大使館も関心をもってください、今後は長期的な調査および対策の兆しが見られます。2015年は、実態分析をさらに進め、体系的な強化にも重点を置いていこうと考えています。

5 パリ日本人学校との交流授業（2月）

日本とは6時間の時差がありますので、容易に交流ができないと感じました。こちらの授業時間は日本では夕方になってしまうので、「塾」とのコラボなど模索しておりましたが、うまくいきませんでした。

そこで、経度がほぼ同じである日本人学校に注目し、交流や共同授業を呼び掛けました。ここで、同郷であるというのはとても力になるものと実感しました。パリ日本人学校にいらっしゃった金澤先生から「いっしょにやろう」と声を掛けていただき、お互いの国のお薦めスポットを作文に書き、紹介し合うという授業をインターネットのテレビ電話で行いました。活動の骨子は金澤先生のアイディアで、それが学習指導要領のどこに当たるかはわたしがアイディアを出しました。

子ども達からは「ケニアに行きたい」「フランスに行きたい」という声が上がりました。このことから、作文の発表によって、お互いの興味・関心を引き出せたことが、作文を書くことのよさを実感することにつながりました。

6 東京学芸大学での科研費申請（1月）

蛇足ではありますが、周りに附属職員から赴任された先生はいらっしゃいますか。附属からいらっしゃった先生方はみなさん、東京学芸大学附属国際中等教育学校の職員ということになります。ということは、附属職員は、東京学芸大学の職員として、科研費の申請を行うことができるのです。

わたしも応募してみました。結果は残念ながら通りませんでしたが、過去に1件通った例があるとのこと。およそ50万円くらい申請が可能です。日本人学校のほとんどで資金不足は共通の悩みではないでしょうか。このような機会を試してみるのはいかがでしょうか。

II 27年度の実践

1 落語家を招いて伝統的言語文化の授業（5月）

このころ、ケニアは渡航レベルが引き上がり、日本からご友人も遊びに来なくなり、大抵の方がしょんぼりしていらっしゃいました。そんな中、歌丸さんのお弟子さん（4番弟子）で、英語落語ができるという桂歌蔵さんから、ケニアで高座ができないかというメールが日本人学校に届きました。

職員のほとんどは、「図々しい！」と拒絶反応を示しました。それもそのはず、落語は無料でやるので、あとは面倒を見てほしいというものだったのです。しかしながら、真打ちは一席（20分程度）で10万円が相場ですので、「これは損な話ではない」と密かに思いました。

そこで、校長に許可をもらい、企画運営をやらせてもらうことになりました。まずは、交通費。幸運なことに、日本人会長が大の落語好きでした。そこで、「日本人総会の懇親会で真打ちから一席どうでしょうか」と提案したら、「交通費は日本人会で何とかしよう」との回答をいただきました。

宿泊場所は拙宅の一室を提供しました。また、ケニア人に英語落語を披露するために、日本人会からスポンサーを募りました。チケット代を取ると、誰も来ないと考えたからで

す。

このような体制を作った上で、落語の授業と一席披露を学校で行っていただくことが可能になりました。大変な活動でしたが、日本人会の様々な方とふれあえる貴重な経験にもなりました（報道ステーションにコメンテーターとして出演経験のあるケニアンナツの佐藤社長宅にお招きいただくこともできました）。

授業は、全校児童生徒を二つに分け、低学年を中心とした話と高学年を中心とした話とに分けて、行っていただきました。落語の歴史や専門用語の解説、笑いはどうやって生まれるのか（洒落と駄洒落との違い）など、わかりやすく解説していただきました。

また、午後からは実際に高座をご披露いただき、落語の雰囲気味わうとともに、笑い転げる子どもが何人も。楽しいひとときを過ごすことができました。



金屏風も座布団も手作りです。「物がないからあきらめるのではなく、何とか工夫して実現させよう」というたくましさも身に付きました。

2 カイロ日本人学校との交流授業（7月）

今年度、ケニア日本人会から各教室に28インチテレビのご寄付をいただきました。このこともあり、全職員で「ICTの活用」を年間テーマに掲げ、授業研究を行うことになりました。

その皮切りとして、パリ日本人学校との実践を参考に、国語「書くこと」の授業において、「お互いの作文を評価し合おう」というねらいで、交流授業を行いました。ここに至

るまで、実は様々な関門がありましたが、新潟派遣の小澤先生から多大なるご尽力を賜ることで実現することができました。

授業後は、小澤先生とスカイプでカイロ日本人学校の協議会の内容をシェアさせていただきました。学習活動と学習内容とのかかわりについて、厳しいご意見もいただきました。しかしながら、活動の意義については、多くの先生方に感じていただくことができました。「こんな活動はどうか」「今度はぜひわたしの学級で」などの声が上がったことを伺うことができました。

○ ナイロビ日本人学校 国語科における個別対応と ICT 活用の考え方

(1) 国語科の願いと児童生徒の姿

国語科の本来的な目標は、他者とのかかわり合いながら、豊かな言語感覚を養ったり、ものの見方や考え方を磨いていくところにある。そのためには、まず1人ひとりが自分の意見をしっかりとつことができるようにしなければならない。ナイロビ日本人学校は、少人数の学級編制になっているため、それぞれの能力や技能に応じて、時間をかけて丁寧に指導することができる。

その一方で、交流活動には腐心している。そこで、授業者の考えや保護者の考えなどを活用し、できるだけ多様な考えに触れさせるよう努めている。しかしながら、やはり同世代の子ども同士のかかわり合いを保証したいところである。

幸い、ナイロビは近年ネットの環境が抜群に良くなり、テレビ電話を行うには絶好の環境にある。また、多くの日本人にとって、ケニアは動物の王国として有名であり、関心をもってもらうことができると考えている。そこで、他校とのネットを通じた交流を数多く行うことを考えている。そうすることによって、知らない場所のことを知りたいという知的好奇心を喚起し、更に、ものの見方や考え方を広げたり深めたりすることができるだろう。

(2) なぜカイロ日本人学校との交流か

そこで、経度のほぼ同じ日本人学校との交流を考えた。時差がないところの方が、日程調整がしやすいと考えたからである。また、ナイロビ日本人学校に限らず、多くの日本人学校でも少人数の学級が増えてきている。双方のニーズが合致するならば、このような実践を積極的に推進していきたい。

今年度は、同じアフリカ大陸のカイロ日本人学校との交流を推進していきたい。エジプトは、歴史も古く文化遺産も豊富にもっている国である。同じアフリカといっても、全く違う姿を見ることができることから、お互いの好奇心を喚起するに十分な条件がそろっている。

(3) 今後の方向性

日本人学校では、本国の職員体制とは異なり、1人ひとりの負担が大きいばかりではなく、国語科の職員の応募数が減少傾向にある。そんな中、今後は複数の日本人学校が共同で授業開発を行っていくことは、大きな意義があると考えている。今後も、実践を積んで、まずは共同授業を行う基礎を築いていき、その後、新たな実践を集積していきたい。

当面は、パリ日本人学校との共同授業をベースに、各国の日本人学校にアプローチしていきたい。

提案後、本校でも何回か協議会を重ね、当日を迎えました。当日資料（学習指導案）には、個人情報何カ所があるため、割愛します。

小規模な日本人学校が増えてきています。だからこそ、横の連携を図りながら、授業を進めていく必要があると思います。スカイプでの授業だけでなく、教材研究会や作成したテストの交換など、ちょっとしたことで、色々な日本人学校と交流できたらと考えています。

Ⅲ ナイロビ日本人学校だより（番外編）

ここからは、わたしの実践ではありませんが、ナイロビならではの出来事をお伝えいたします。

1 さだまさしさん訪問

本校校長のモットー「来る者は拒まず」効果でしょうか。昨年度、「風に立つライオン」の撮影の関係で、ケニアに有名人が来られました。そんな中、さだまさしさんから、「日本人学校でコンサートを行いたい」との申し出があり、実現しました。この様子は、日本でもBSで放送されたようです。

「30分くらいね」とおっしゃっていたのですが、終わってみればほぼ3倍の時間、たっぷりと歌ってくださいました。日本人会の方々が300人以上集まりました。歌を聴きながら、涙を流す人があちらこちらで見られました。



2 持久走の授業

ケニアといえば長距離王国！現地にいらっしゃる日本人の方を介して、日本で活躍している選手がいます。ある期間を過ぎますと、ケニアに戻ってきます。そんな人たちが、日本人学校に持久走のコツを教えに来てくれます。

今年度は、ジュリアスギタヒさんという方が講師をしてくださいました。仙台育英高校に留学し、その後、日清食品で選手として活躍。北海道マラソン優勝、東京マラソン3位、シドニーオリンピックケニア代表という輝かしい経歴の持ち主です。



小学生の時、家から学校までは8キロあったのだそうです。もちろん毎日徒歩ですが、驚いたことに、お昼を食べるために毎日、家に帰るのだそうです。小学生のころ、最低でも32キロ走らなければならず、それで自然と足が速くなったのだそうです。

現在は放牧の仕事をしてしながら、ケニアで後継者を育てているのだそうです。

IV 番外編の番外編

1 ケニアの治安について

2年前、外国人が多く利用するショッピングセンターでテロが発生しました。また、今年に入ってから、大学が襲撃されました。大学は、われわれが決して足を踏み入れることのない地域でしたので、外国での事件くらい、精神的にも実際の距離でも遠いところの話だととらえる人が多かったのですが、ショッピングセンターは、私たちの居住区から車で15分くらいの所でしたので、未だに尾を引いています。

しかしながら、先日このショッピングセンターが再オープンしたのです。初日は大勢の人が行列を作っていたとか。頼もしいというか何というか…。あの事件以来、どのショッピングセンターも入りロゲートで車の中をガードマンが確認し、ホール入り口には金属探知機が設置されるようになりました。当然、このショッピングセンターもそのような設備が整っているのですが、心情的にはちょっと、行こうとは思えません。

遠くから撮影したものですが、それでも、もしガードマンに見つかったら、体の隅々まで調べられるでしょう。ドライバーに「こんなこと（再オープン）、日本では絶対がないよ。」と言いますと、「OK」と返答がありました。何がどうOKなのか分かりませんが。

日本人会では、大使館から「朝一番の人が少ない時間に、子どもを連れずにサッと買いものを済ませるように」と、何度も注意喚起があります。



そのほか、強盗事件やカージャックなど、かなり恐ろしい事件も耳にします。これに対しては、「物より命」「絶対に抵抗しないように」と、念を押されています。殺傷能力のある銃が、2万円くらいの安値で売買されています。抵抗するとすぐにぶっ放します。

幸い、日本人学校の児童生徒を含めた関係者で、このような事件に巻き込まれた人はいません。この情報よりも、上述の怖い情報の方が広まりますので、年々、日本人観光客や赴任者が減少するのではないかと懸念しています。

年末年始、ワイルドなケニアをご自身の目で確かめにいらっしやいませんか？

2 ワイルドといえば、サファリツアー

意外と都会ナイロビ。動物を見るためには、これも意外かもしれませんが、ナイロビから数百キロ離れた国立公園や国立保護区で高いお金（外国人は24時間で8000円くらい）をはらう必要があります。そこで、ようやくみなさんが想像するような世界を堪能できるわけです。この国立公園や保護区はケニア全土のおよそ8%。そこには、ケニア全土の80%の野生どうぶつが生息しているということですから、それは、たくさん見ることができます。

しかしながら、肉食の動物は、これまた意外ですが、みることができたラッキーというくらい、レアなのです。にもかかわらず、観光ポスターには狩りをしている瞬間やヌーの川渡りがいつでも見られるかのようなものばかり。

運が良ければ、1日で見える人もいれば、運が悪ければ4日間滞在しても、肉食の動物は昼寝をしているライオンだけなんていうこともあるのです。特に、サイや豹は激レアで、どちらか一方を目にするだけでも、超ラッキーです。わたしはここに来て3年目ですが、豹にお目にかかったのは、5回目のサファリ的时候でした。

そうかと思えば、教え子が遊びに来たのですが、彼は1回目のサファリですぐに豹とご対面。そして数日後の2回目のサファリでもご対面。強運の持ち主です。



ヌーをしとめてランチタイム

注：写真に写っている彼は教え子ではありません。



ライオン・豹・サイ・バッファロー・ゾウを「ビッグ5」と呼びます。ハンターが最も雁が難しい動物としてそう呼んだのだそうです。今は銃の代わりに、この5種類を写真に収めようと世界各国から観光客がやってきます。

V まとめ

日本から遠く離れたここケニアでは、多くの日本人の方が様々な分野で活躍なさっています。色々な面でかなり過酷な状況があり、それでも前を向いて進んでいけます。そのような方々が、安心してお仕事ができるよう、お預かりしたお子様を日本の学校に勝るとも劣らない教育内容を提供するべく、精一杯教育活動に取り組んでおります。

しかしながら、教育設備の不足や人員削減など、教育活動を進めるに当たり、良い材料ばかりではありません。

このことは、もちろんケニアに限ったことではありません。だからこそ、他の日本人学校と連携を図り、お互いの知恵を共有し合うことの意義は大きいと考えております。

ご紹介いたしました実践につきまして、ご意見をいただけましたら幸いです。

今後ともよろしくお願い申し上げます。

追伸

任期3年目になりました。現在のところ、今年度限りで帰国することとなりそうです。もしも、ケニアにご興味をお持ちの方がいらっしゃいましたら、年末年始でしたら、到着の空港からご出発の空港まで、お世話いたします。ご遠慮なくお申しつけください。